

句複合語と有標語順

時崎久夫・桑名保智（札幌大学）

toki@sapporo-u.ac.jp

本発表では、句複合語(phrasal compound)が、Holmberg (2000)の Final-Over-Final Constraint (FOFC)に違反する句に近似すること、またどちらも特定の言語で容認されることを指摘する。そして、ある言語が FOFC に違反する語順の句を容認するならば、句複合語も許すという言語類型論的普遍性を提案する。さらに、この一般化がなぜ成り立つのかを、生成文法の枠組みで、補部が指定辞位置へ移動して主要部に音韻的に編入し、複合語的なまとまりを作るという議論を通して考察する。

句複合語は、語の内部に句を含む $[_N [_{PP} \text{over } [_{NP} \text{the fence}]] \text{gossip}]$ のような構造を持つが、これは Holmberg (2000)の、諸言語に存在しない句の語順を説明する制約 FOFC (句 αP が主要部先端 (head-initial) ならば、 αP を直接支配する句 βP も主要部先端である) が禁ずる構造 $*[_{\beta P} [_{\alpha P} \alpha \gamma P] \beta]$ と近似している (上記の例では、 $\alpha = P, \beta = N, \gamma = N$, ただし $\beta P = \beta = N$ と考える)。

本研究が注目するのは、句複合語が、語は句を含まないという制約 No Phrase Constraint (NPC) (Botha 1984, Lieber 1992) に違反しながらも、特定の言語で許されること、そして FOFC が禁ずる句の語順も、実際には特定の言語で許されること、さらに FOFC 違反の語順の句を許す言語 (ドイツ語・オランダ語など) は、句複合語も許す (逆は成り立たない) ことである。

まず、Kayne (1994) に従い、諸言語の基底語順を主要部・補部 $[X YP]$ とし、補部・主要部の語順は、補部が指定辞位置へ移動して派生され、膠着的になると仮定する (cf. Julien 2002)。本研究は、移動のできる $[YP [X t]]$ が膠着的になるのは、音韻的に $[YP X]$ という左枝分かれ構造となり、補部が主要部に音韻的に編入した複合語的なまとまり $YP-X$ を作るためであると論じる。

すると、日本語のような主要部末端 (head-final) 言語は語から句のレベルまで小さい範疇から階層順に、補部が移動し主部に音韻的に編入をすることになる。しかし句複合語では、含まれる句のレベルで補部の移動・編入が起こらないのに、それを支配する語のレベルで、その句の移動・編入が起きて $[_Z [_{XP} X YP]-Z]$ という構造を作っている。

これは語レベルの有標な編入であるが、ドイツ語などでは、より大きな句のレベルで $[_{VP} [_{PP} \text{nach Berlin}] \text{gehen}]$ (go to Berlin) などの $[_Z [_{XP} X YP]-Z]$ という、さらに有標な編入による複合語的構造を作っていることになる。これが句レベルに適用する FOFC の違反であり、これを許す言語が、より小さな語レベルに適用する NPC の違反を許して句複合語を持つのは当然のことと考えられる。よって、ある言語が FOFC に違反する語順の句を許すなら、句複合語も許すという一般化が成り立つものと考えられる。

言語のどういう特徴が、句複合語や FOFC 違反の語順を許すのかについては、強勢の位置などの可能性を考えているが、現段階では、よくわかっていない。また、句複合語を許す言語は他に何かがあるかについても検討が不十分である。今回の発表で参加者からの助言を仰ぎたいと考える。

(1,396 字)